

## 獨逸語教科書に採用されたグリム童話

—明治・大正期を中心に—

### Reception of Grimm's Fairy Tales in Japan:

### A Study of German Textbooks from the Meiji and Taisho Eras

野口 芳子

NOGUCHI Yoshiko

#### 要旨

この論文の目的は、明治期と大正期において日本で出版された獨逸語教科書のなかに、どのようなグリム童話が紹介されているのかを明らかにし、その理由について考察することである。

英語教科書によるグリム童話の導入についての研究は進んでいるが、獨逸語教科書による導入についての研究はほとんどなされていない。調査の結果、エンゲリン讀本、ボック讀本などを中心に、27冊の獨逸語教科書に25種類のグリム童話が収録されていることが判明した。もっとも多く収録されているのは、KHM78「老いた祖父と孫」とKHM146「蕪」であり、いずれも現在では知名度の高い話ではない。「忠孝の徳」などの教訓を説く話を中心に選ばれたからであろう。一方、児童雑誌で紹介された「狼と七匹の子山羊」、「蛙の王様」、「白雪姫」などの話は、その後広く一般に普及していく。「文学性」を中心に選ばれたからであろう。獨逸語教科書に採用されたグリム童話は「教訓性」に焦点を当て、児童雑誌に掲載されたグリム童話は「文学性」に焦点を当てて選択されたのであろう。時代の要求に沿った道徳心ではなく、想像力を磨く話が後世に残るということであろう。

#### Abstract

This paper aims to identify the types of fairy tales by the Brothers Grimm that were chosen for German textbooks published in Japan during the Meiji and Taisho eras and to examine the reasons for their selection.

While research has been progressing on the types of fairy tales imported into Japan through English textbooks, there has been relatively little research into German textbooks. Twenty-five different Grimm's fairy tales were found from Twenty-seven German textbooks, mainly in Engeliens readers and Bock readers.

The most commonly published tales were 'An Old Grandfather and His Grandson' and 'The Turnip' both of which are not so well-known presently. These tales were probably chosen because of the underlying moral values, which were shared with stories, such as 'Loyalty to the Emperor and Piety to Parents'. In contrast, stories such as 'The Wolf and the Seven Young Goats', 'The Frog-King', and 'Snow White', which were often published in children's magazines, became widely popular because their content involved fantasy and captivated the imagination of young readers.

The Meiji and Taisho German textbooks thus favored fairy tales emphasizing moral values, while children's magazines offered stories with literary value. Thus, in summary, stories that cultivate children's imagination prevail longer than stories imbued with moral codes.

#### Key Words

グリム童話、獨逸語教科書、日本での受容、明治・大正期、道徳教育

Grimm's Fairy Tales, German textbooks, Reception in Japan, Meiji and Taisho eras, moral codes

## 序論

グリム童話が最初に日本に導入されたのは英語教科書によるものであるということが、府川源一郎によって明らかにされた<sup>1</sup>。幕末から使用されたアメリカの読本 *Sargent's Standard Third Reader* (1859) なかで、グリム童話 KHM184 「釘」(Der Nagel)が「The Horse-Shoe Nail」として紹介され、その訳本『サルゼント氏第三リイドル』が1873(明治6)年4月に松山棟庵によって、「<sup>かなぐつ</sup>鉄沓の釘の事」という題で紹介されている<sup>2</sup>。現在のところこれがグリム童話の最初の邦訳であるとされている。その後グリム童話 KHM83 「幸運なハンス」がイギリスの *Chamber's standard reading books* (1875) に収録され<sup>3</sup>、さらに KHM75 「狐と猫」がアメリカの *Swinton's Third Reader* (1885) に収録される<sup>4</sup>。チェンバーズの上記の教科書には「シンデレラ」や「赤ずきん」も収録されているが、グリム版ではなくペロー版の内容であることが、川戸道昭により明らかにされている<sup>5</sup>。

このように英語教科書によるグリム童話の導入についての研究は進んでいるが、獨逸語教科書によるグリム童話の導入についての研究はなされておらず、先行研究も皆無に等しい状態であった。2020年に初めて小泉直美が『エンゲリン讀本』におけるグリム童話とドイツ伝説」という論文で、獨逸語教科書によるグリム童話導入について研究の端緒を開いた。小泉によると『エンゲリン讀本』はABCの3種類あり、Aは1号から5号、Bは1号から3号、Cは1号から2号の合計10種類存在するという。そのうち訳本が存在するのは、A巻1号、2号、3号の3冊のみであり、1894年から1898年にかけて5人の翻訳者によって10冊の訳本が出され、11話のグリム童話が邦訳されたという<sup>6</sup>。小泉の研究により、獨逸語教科書『エンゲリン讀本』に訳出されたグリム童話の詳細が明らかになった。しかし、他の獨逸語教科書ではどのような話が収録されているのか、不明のままである。獨逸語教科書はエンゲリン(Engelien)<sup>7</sup>だけでなく、ボック(Bock)、ホップフ(Hopf)、パウルジーク(Paulsiek)、ブーフハイム(Buchheim)、ムフ(Muff)など多くの著者や編者によって出版されている。本論の目的は、日本の学校で使用された獨逸語教科書に収録されたグリム童話の実態を調査し、詳細を明らかにすることである。その結果、グリム童話集のなかのどの話が最も多く収録されたのか。また、それはなぜなのか。その理由についても考察していく。

## 第1章 明治・大正期にグリム童話を採用した獨逸語教科書

### 1. 獨逸語教科書の収集方法とその概観

明治期と大正期に出版された獨逸語教科書については、国立国会図書館や各大学図書館が所蔵しているもの、古書サイトで個人購入したものなどを中心に調査した。その結果、グリム童話を収録した獨逸語教科書を27冊収集することができた。そこに収録されたグリム童話はドイツ語のもの(独)、日本語に訳されたもの(日)、独日併記のもの(独日)の3種類の形態を持つ。下記の表1ではそれを「独、日、独日」と表記している。また、内容がグリム童話にほぼ忠実なものは「○」、かなり変更されているものは「△」、異なる話になっているものは「✖」で示している。記号の後の数字は使用されたグリム童話の版を示し、「○2」は第2版の使用を意味する。4頁の表2の収録回数は○と△のみを対象とし、✖は対象外として集計したものである。

なお、本論でのグリム童話の日本語訳は題名も含めてすべて下記の原典からの拙訳である。

Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. 3 Bde. Hrsg. v. Heinz Rölleke. Stuttgart: Reclam, 1980.

### 2. グリム童話を含む獨逸語教科書一覧(年代順)【表1】

番号	西暦 明治年月	編/譯者	収録本名	収録題名	出版社	言語 独日	KHM 番号	内容
1	1892 25.9	近藤衡平譯	ボック氏第二讀本獨 學意解	狐ト猫 (Der Fuchs und die Katze)	誠之堂書 店	独日	75	△
2	1894 27.1	Bock, Eduard	F. Hirts Lesebuch für Volksschulen Ausgabe C, Teil II	Der Fuchs und die Katze Die Sternthaler Der Fuchs und der Wolf	Rokugo kwan	独	75 153 73	○2 ○3 ✖
3	1894 27.8	島約翰譯	ボック第二讀本解釈	狐ト而シテ猫 蕪 星錢 狐ト狼	文港堂	日	75 146 153 73	○ △ ○ ✖

4	1894 27.10	岡本啓次郎譯	エンゲリン第一讀本 解譯	老ヒタル祖父及孫 狼及狐 年老ヒタル(スルタン犬名) 精靈 巧婦鳥及ヒ熊 狼及ヒ人間	文港堂	日	78 73 48 39-I 102 72	○ ○ ○ ○ ○ ○7
5	1895 28.3	田中廉二譯	エンゲリン氏フヘヒネル 氏 第一讀本獨案内直譯	老タル祖父而テ孫 狼而テ狐	若林春和 堂	日	78 73	○ ○
6	1895 28.3	第一高等学校獨逸 文学研究科教員選	獨逸語讀本 第二卷	Märchen vom Meister Pfriem	南江堂	独	178	△
7	1895 28.4	第一高等学校獨逸 文学研究科教員選	獨逸語讀本 第一卷	Der Fuchs und die Katze Der alte Großvater und der Enkel Der Nagel Die Rübe Das Hirtenbüblein Die Boten des Toten	南江堂	独	75 78 184 146 152 177	○2 ○ ○ △ ○ ○
8	1895 28.7	松原善蔵編	獨逸讀本 第貳	Der Zaunkönig	獨逸語学 校	独	171	△
9	1895 28.7	松原善蔵編	獨逸讀本 第三	Das Hirtenbüblein Doktor Allwissend	獨逸語学 校	独	152 98	○ ○
10	1896 29.8	中村道夫譯	エンゲリン第二讀本 獨學自在上卷	幸福ニ於ケルハンス 貧窮人ト而シテ富貴ノ人 ドルンレースヘン	金刺芳流 堂	日	83 87 50	○ ○ ○
11	1896 29.12	佐川外喜男譯	エンゲリエン、フエヒ ネル第一讀本獨案内 後編	年老タルズルダン 沃怪 巧婦鳥及ヒ熊 狼及ヒ人間	博愛堂	日	48 39-I 102 72	○ ○ ○ ○
12	1897 30.1	中村道夫譯	ボック氏第二讀本獨 案内 下卷	Die Rübe/蕪	金刺芳流 堂	独日	146	△
13	1897 30.4	中村道夫譯	エンゲリン第二讀本 獨學自在下卷	ス子ーウイツトヘン	金刺芳流 堂	日	53	○
14	1897 30.4	中村道夫譯	エンゲリン第一讀本 獨學自在	老タル祖父ト而シテ孫 狼ト而シテ狐 老イタルズルタン 小妖怪 鷓鴣ト而シテ熊 狼ト而シテ人間	金刺芳流 堂	日	78 73 48 39-I 102 72	○ ○ ○ ○ ○ ○7
15	1897 30.7	大村仁太郎/山口小 太郎/谷口秀太郎	獨文讀本 第一	Die Rübe Der süße Brei	獨逸学協 会	独	146 103	△ ○
16	1898 31.4	第五高等学校龍南 会編	新選獨文讀本	Die Rübe Der alte Großvater und der Enkel Der Alte Sultan	南江堂	独	146 78 48	△ ○ ○
17	1898 31.4	大村仁太郎/山口小 太郎/谷口秀太郎	獨文讀本第二	Der alte Großvater und der Enkel	獨逸語学 雑誌社	独	78	○
18	1898 31.6	近藤衡平譯	獨逸エンゲリン第三 讀本直譯下卷	匠長ノブリームカラノ物語	誠之堂	日	178	△

19	1898 31.8	中村道夫譯	ボック氏第三讀本直 譯註解 上卷	牧童 狐ト而シテ狼 ロートケップヘン フラウ ホルレ 荊薔薇 貧人ト而シテ富人	金刺芳流 堂	日	152 73 26 24 50 87	○ ○ ○ ○ ○ ○
20	1898 31.9	中村道夫譯	エンゲリン第三讀本 直譯註解下卷	親方フリームノ小説	金刺芳流 堂	日	178	△
21	1898 31.9	大村仁太郎／山口小 太郎／谷口秀太郎	獨文讀本第三	Der Arme und der Reiche	獨逸語学 雜誌社	独	87	○
22	1899 32.7	大村仁太郎／山口小 太郎／谷口秀太郎	高等獨文讀本 上卷	Märchen von Meister Pfriem	獨逸語学 雜誌社	独	178	△
23	1913 大正 2.4	獨逸語学雜誌社編	獨文讀本卷之一講義	Die Rübe／蕪菁 Der süße Brei／うまき粥	精華書院	独日	146 103	△ ○
24	1913 2.6	内田新也編	図説 獨逸讀本 第一 卷	Der Wolf und der Mensch	南江堂	独	72	○
25	1916 5.1	小池堅治編	高等学校初級用 新獨 逸語讀本	Froschkönig Dornröschen Aschenputtel Rotkäppchen	丸善	独	1 50 21 26	△ ○ △ ○
26	1921 10.8	三浦吉兵衛 青木昌吉	新選獨逸讀本卷一	Dornröschen	郁文堂	独	50	○
27	1921 10.10	三浦吉兵衛 青木昌吉	新選獨逸讀本卷一	Die Bremer Stadtmusikanten	郁文堂	独	27	○

## 第2章 獨逸語教科書に収録されたグリム童話

### 1. 獨逸語教科書に収録されたグリム童話の頻度順位表【表2】

総合 順位	収録数 独+日	KHM 番号	ドイツ語題名	日本語題名	日本語 訳順位	収録数 日
1	6回	78	Der alte Großvater und der Enkel	老いた祖父と孫	2	3回
1	6回	146	Die Rübe	蕪	2	3回
3	4回	73	Der Wolf und der Fuchs	狼と狐	1	4回
3	4回	72	Der Wolf und der Mensch	狼と人間	2	3回
3	4回	48	Der alte Sultan	老犬ズルタン	2	3回
3	4回	75	Der Fuchs und die Katze	狐と猫	8	2回
3	4回	50	Dornröschen	いばら姫	8	2回
3	4回	178	Meister Pfriem	プフリーム親方	8	2回
9	3回	39-I	Die Wichtelmänner I	小人 I	2	3回
9	3回	102	Das Zaunkönig und der Bär	ミソサザイと熊	2	3回
9	3回	87	Der Arme und der Reiche	貧乏人と金持ち	8	2回
9	3回	152	Das Hirtenbüblein	羊飼いの童	12	1回
13	2回	26	Rotkäppchen	赤ずきん	12	1回
13	2回	103	Der süße Brei	甘い粥	12	1回
13	2回	153	Der Sterntaler	星の銀貨	12	1回
16	1回	53	Sneewittchen	白雪姫	12	1回
16	1回	83	Hans im Glück	幸運なハンス	12	1回

16	1回	24	Frau Holle	ホレおばさん	12	1回
16	1回	184	Der Nagel	(釘)		
16	1回	171	Der Zaunkönig	(ミソサザイ)		
16	1回	177	Die Boten des Toten	(死神の使い)		
16	1回	21	Aschenputtel	(灰かぶり)		
16	1回	1	Froschkönig	(蛙の王様)		
16	1回	98	Doktor Allwissend	(物知り博士)		
16	1回	27	Die Bremer Stadtmusikanten	(ブレーメンの音楽隊)		

## 2. ドイツ語と日本語で収録されたグリム童話の概観

明治期と大正期に出版された獨逸語教科書 27 冊には 25 種類のグリム童話が収録されている。そのうちドイツ語で収録されているものは 14 冊、日本語に訳されたものは 10 冊、独日併記が 3 冊である。ドイツ語と日本語を合わせて 1 番多く 6 回収録されているのは 2 話あり、KHM78 「老いた祖父と孫」と KHM146 「蕪」である。3 番目が 4 回で 6 話あり、KHM73 「狼と狐」、KHM72 「狼と人間」、KHM48 「老犬ズルタン」、KHM75 「狐と猫」、KHM50 「いばら姫」、KHM178 「プフリーム親方」である。9 番目は 3 回で 4 話あり、KHM39-I 「小人 I」、KHM102 「ミソサザイと熊」、KHM87 「貧乏人と金持ち」、KHM152 「羊飼いの童」である。13 番目は 2 回で 3 話あり、KHM26 「赤ずきん」、KHM103 「甘い粥」、KHM153 「星の銀貨」である。16 番目は 1 回で 10 話あり、KHM53 「白雪姫」、KHM83 「幸運なハンス」、KHM24 「ホレおばさん」、KHM184 「釘」、KHM171 「ミソサザイ」、KHM177 「死神の使い」、KHM21 「灰かぶり」、KHM1 「蛙の王様」、KHM98 「物知り博士」、KHM27 「ブレーメンの音楽隊」である。なお、✳印をつけた 2 話はいずれも、ボック氏第二讀本に収録されている「狼と狐」である。ドイツ語版と日本語版【表 1 の 2, 3】とも要約のみの収録で、内容もグリム童話とは異なっているので、集計に含めていない。

## 3. 日本語で収録されたグリム童話の種類

獨逸語教科書が訳されて日本語で収録されている話のなかで、1 番多いのは 4 回の KHM73 「狼と狐」である。2 番目は 3 回で 6 話あり、KHM78 「老いた祖父と孫」、KHM146 「蕪」、KHM72 「狼と人間」、KHM48 「老犬ズルタン」、KHM39-I 「小人 I」、KHM102 「ミソサザイと熊」である。8 番目は 2 回で 4 話あり、KHM75 「狐と猫」、KHM50 「いばら姫」、KHM178 「プフリーム親方」、KHM87 「貧乏人と金持ち」である。12 番目は 1 回で 7 話あり、KHM152 「羊飼いの童」、KHM26 「赤ずきん」、HM103 「甘い粥」、KHM153 「星の銀貨」、KHM53 「白雪姫」、KHM83 「幸運なハンス」、KHM24 「ホレおばさん」である。

## 第 3 章 収録回数をもっとも多いグリム童話についての解説（ドイツ語と日本語の合計数）

### 1. 1 番—KHM78 「老いた祖父と孫」（6 回：ドイツ語 3 回 日本語 3 回）

#### 1) 出典とあらすじ

この話はユンク=シュティリンク (Johann Heinrich Jung-Stilling 1740-1817) の自伝小説『ハインリッヒ・シュティリンクの青春』(*Heinrich Stillings Jünglingsjahre 1778*) から取ったものである。彼はマールブルクに住んだこともある憲法学者、経済学者、眼科医で、作家としての著作も数多く残している<sup>8)</sup>。

年を取って、目も見えにくく、耳も遠くなり、歯もなくなり、手足が震えて、食器もしっかり持つことができなくなった父親を息子夫婦は邪険に扱い、食卓と一緒に食べさせず、木の食器を与え、部屋の隅で食事させる。分量もほんの少ししか与えない。それを見ていた 4 歳の孫は、木片で食器制作を始める。親が理由を聞くと、将来これで両親に食事をさせるためと答える。これを聞いて息子夫婦は老いた父親に対する自らの行動を反省する。

#### 2) 翻訳者と翻訳内容の分析

1 番目はエンゲリン讀本の岡本啓次郎譯【表 1 の 4】である。訳者岡本は長野県の平民で 1896 年の『修身宝訓』の出版人であるが、詳細は不明である。エンゲリン讀本の緒言には、この本が日本の学校で 1 番使用されている本であるが、ドイツ語のレベルが高くて、今まで邦訳者が現れなかったと書かれている。

彼の訳は原文に忠実であるが、„Schüsellenchen“ (小鉢) を皿と訳している。明治期の『挿図増訂 獨和字典大全』(初版 1885 年) には„Schüsellenchen“の項目に「皿、鉢」とある<sup>9)</sup>。„chen“は名詞の縮小形を示す語であるが、ここで

はそれが無視されている。辞書で最初に挙げられている「皿」を採用したと思われるが、皿は„Teller“なので、„Schüssel“は鉢か深皿と訳すべきであろう。「彼女カペニ 一二 (ヘルレル) テ木の皿ヲ買ヒシ」と訳され、木皿を買ったのは妻であり、貨幣単位はヘラー (Heller) と正確に訳されている。

2 番目は同じくエンゲリン讀本の田中廉二譯【表 1 の 5】である。田中はルドルフ・レーマンにドイツ語を習ったと思われる。なぜなら、1889 (明治 22) 年の彼の著書『獨逸文典略譯解』(春和堂) の表紙に「リウードルフ・レーマン先生校閲 帝国第一高等中学校御雇教師」と明記されているからである。

彼の訳は原文に忠実であるが、„Schüsselchen“は「小皿」と訳されている。縮小形は理解していて「小」をつけた点は評価できるが、「小鉢」とは訳されていない。「彼レガ彼レニーツノ木ノ小皿ヲ一ニヘルテルデ買ヒシ」とある。ここでは「彼」は妻を指すものと思われる。日本語の三人称代名詞に男女の区別がもたらされたのは、明治期でも言文一致運動が浸透してからである<sup>10</sup>。この訳文は文語体で書かれ、言文一致体ではないので、「彼」は男女両方を指すものであろう。貨幣単位はヘラーと正確に訳されている。

3 番目は第一高等学校教員編のドイツ語版【表 1 の 7】である。原文に忠実であるが、1 箇所だけ決定版で単数形 (kaufte) の動詞が複数形 (kauften) に変更されている。それによって木鉢は妻がひとりで買ったのではなく、夫と一緒に買ったことになる。グリム兄弟の原典では初版から 6 版までは kauften と複数形になっているが、7 版の決定版で単数形に改変される。つまり、夫婦で木鉢を買ったのが、妻が単独で買ったことにされたのである。グリム兄弟の改変は悪行を女性に押し付ける傾向が指摘されている<sup>11</sup>。第一高等学校教員編はグリム童話の決定版ではなく、2 版から 6 版までの版を使用したと思われる。

4 番目はエンゲリン讀本の中村道夫 (道四郎) 譯【表 1 の 14】である。ここでも小鉢は小皿と訳され、妻が「木製ノ皿ヲ一雙ノ『ヘルレル』(銅貨ノ名) ニ向ツテ買ヒシ」と訳されている。

5 番目は第五高等学校編のドイツ語版【表 1 の 16】で原文に忠実なものである。第一高等学校教員編とは異なり、単数形の kaufte が用いられ、決定版のドイツ語文になっている。編集には明治 31 年 8 月まで教鞭をとっていた賀来熊次郎が携わっていたと思われる。

6 番目は大村仁太郎/山口小太郎/谷口秀太郎編のドイツ語版【表 1 の 17】で、原文の祖父の描写が簡略化されたり、語句が変えられたりしている。例えば„satt“ (腹一杯) を„genug“ (十分) に変更し、„ekelten sich davor“ (毛嫌いした) を„mochten das nicht leiden“ (我慢ならなかった) に変えている。ここでも鉢を買うのは妻ひとりではなく、妻と夫になっている。そのうえ木製鉢の値段は„Heller“ (ヘラー) から„Pfennig“ (ペニツヒ) に変えられている。読者にわかりやすいように貨幣単位を変更したのかもしれないが、ペニツヒはヘラーの 2 倍の価値があるので、木鉢の安物の度合いが和らげられてしまう。以上、細部において少しの変更はあるものの、総じて原文にほぼ忠実な訳といえる。

### 3) 収録された理由についての考察

老人虐待をしていた息子夫婦が、将来老いると自分たちも息子から同様の扱いを受けるということに気づき、自らの行為を反省するという内容の話である。この話はフィクションではなく、中世の現実の生活の一端を描いたものであるといえる。なぜなら、この種の話は様々な形で語られているからである。

息子に国を譲った老いた王は、息子の嫁に咳が気になるといわれて、階段の下に藁を敷いて寝かされる。馬用の上掛けを祖父に渡すとき、孫は 2 つに切って渡す。なぜ 2 つに切るのかと父親が聞くと、将来あなたに必要なだからだと答える。それを聞いて息子は反省する。この話はハンス・ザックス (Hans Sachs 1494-1576) がニュルンベルクの伝承として紹介したものである<sup>12</sup>。貧しい平民だけでなく、王でさえ権力を失い老化すれば、息子たちから虐待されるのである。自分たちの日々の生活を支えるのに四苦八苦ししていたころ、肉体的に弱り自立できない老人を介護する余裕は人々にはなかったのであろう。そのことがメルヒェンという形で語られているのである。老人虐待の実態を語った信憑性がある話だけに、「忠孝の徳」を説く明治政府の方針に沿った話といえる。おそらく、その点が日本の学校の教科書に多く収録された理由であろう。

## 2. 1 番—KHM146 「燕」 (6 回: ドイツ語 5 回、日本語 3 回)

### 1) 出典とあらすじ

グリム兄弟の原注によると、この話は中世のラテン語の韻律詩から採集されたもので、原題は„Raparius“といひ、1814 年にヤーコプ・グリムが 14 世紀に書かれたシュトラースブルクの手書き本から採集したものだ<sup>13</sup>。

貧乏な弟が大きな燕を王に献上して褒美をもらい金持ちになる。それを聞いた金持ちの兄は自分も王から褒美

をもらおうと思い、金貨や馬を王に献上する。返礼として王は大きな蕪を兄にやる。怒った兄は弟の殺害を殺し屋に依頼する。弟は袋に詰められ木に吊るされる。弟は通りがかりの学生に声をかけ、知恵袋の中で学問を修得したと言うと、学生は袋に入れてくれと頼む。弟は袋から出してもらい、学生を袋に入れて吊して立ち去る。

## 2) 翻訳者と翻訳内容の分析

1 番目の収録は第一高等学校獨逸文学研究科教員選定のドイツ語版【表1の7】である。ここでは全文ではなく、前半の話のみで終わっている。つまり、弟が王に献上した大きな蕪を今度は兄が王から返礼としてもらうところで話は終了しているのである。その後兄が弟に対して行う報復行為や、弟が知恵を絞って他人を騙し、命拾いするエピソードは省略されている。この話のテーマは前半部分にあるので、前半のみの収録でも話の骨子は伝わると思うが、報復を企てる敵に対しては策を弄してでも打ち勝つべきであるという後半の教訓は、「富国強兵」を唱える明治期の教育には無視できないものと思われる。

前半のみの収録になった理由を探るため、ドイツ本国で出版されたドイツ語教科書に当たってみた。すると同じように話が前半のみで、ドイツ語の表現がグリム童話と異なっている教科書が見つかった。F. クリーガー

(Ferd Krieger) と G. N. マールシャフ (G. N. Marschaff) 編『小学校中学年用ドイツ語讀本 I』で1878年出版のものである<sup>14</sup>。この本の改変箇所は一高の教科書とすべて同じである。例えば原文の„Soldaten“ (兵隊) は „Kriegsleute“ (戦闘員) に、蕪の献上は「尊敬の念」(Verehrung) を伝えるために、単なる「贈り物」(Geschenk) に、金持ちの兄の献上品は「黄金と馬数頭」(Gold und Pferde) だが、ここでは「六頭の非常に美しい馬」(sechs außerordentlich schöne Pferde) に改変されている。おそらく一高の教員は編集の際に、この本に掲載されていたグリム童話「蕪」を収録したのであろう。なぜなら、ヘルバート学派は兄弟喧嘩や詐欺などの不道德な行為を避けるべきであるとしているからである<sup>15</sup>。

2 番目はボック讀本の中村道夫譯【表1の12】で独日併記の収録である。グリム版の原文を大幅に改変したもので、1 番目と同様、前半の話のみで終わっている。ここでは農夫は兄弟ではなく、貧乏人と金持ちとされている。貧乏人が大きな蕪を王に献上して、3枚のドカーテン金貨をもらう。それを聞いた金持ちの農夫は美しい子牛を王に献上して、返礼を期待する。しかし王は金持ちの魂胆に気づいて、返礼に大きな蕪を与える。ボックは出典を Grimm としているが、グリム版とは異なる点が多い。貧乏人と金持ちが兄弟ではないこと、金持ちが持参するのが金貨や馬ではなく子牛であること、後半の話が欠落していることなどである。正確な出典は不明であるが、前半はグリム童話の骨子と同じなので、グリム童話の改変版としておく。

3 番目は大村仁太郎/山口小太郎/谷口秀太郎編のドイツ語版【表1の15】で、4 番目は第五高等学校龍南会編のドイツ語版【表1の16】である。この2冊はいずれも2 番目のボック讀本と同じ内容のグリム童話改変版を収録している。

5 番目は獨逸語学雑誌社編の独日併記版【表1の23】で、ボック讀本と同じ内容の改変版である。ようするに、教科書に収録された「蕪」は、すべてグリム版の話を前半で切った縮小版なのである。

## 3) 収録された理由についての考察

貧乏で善良な弟と金持ちで嫉妬深い兄という構図はメルヒェンの定番である。しかし、この弟はやられてばかりの善人ではなく、自らの機転と才覚で人を騙して危機を脱する。策を弄して敵に打ち勝つ姿勢を推奨する話として採用されたのかと思うと、どうもそうではないようである。なぜなら、収録された話はすべて前半部分だけだからである。後半部分では兄が弟を殺そうとしたり、弟が学生を騙して危機突破を謀ろうとしたりするので、教育上相応しくないと判断されたのであろう。ヘルバート学派は道德性を重視し、盗賊、詐欺、兄弟喧嘩など残酷な行為を避けるよう指導する。ハウスクネヒトにヘルバート学派のドイツ語教授法を学んだ明治期の教育者やキリスト教道德を重んじるボックは<sup>16</sup>、兄弟同士が殺し合う場面は避けた方がいいと判断したのであろう。

## 第4章 収録回数が多く、特筆すべき改変がある話

### 1. 3番-KHM73「狼と狐」(4回: 日本語4回)

#### 1) 出典とあらすじ

この話はグリム兄弟の原注によると、第2版から入れられたもので、ヘッセンで口承収集した話にアウアーバッハ (Ludwig Auerbacher 1784-1847) の『バイエルンの伝承』(Erzählungen aus Baiern) の話や、パーダーボルン在住のヘクストハウゼン家の話を混成したものである<sup>17</sup>。

いつも狼に餌をよこせと命じられていた狐が、農夫の地下にある肉を食べに行こうと狼を誘う。狐は抜け穴を通り抜けることができるよう調節しながら食べるが、狼は気にせず食べまくる。農夫が見回りに来たとき、狐は穴から逃げ出すが、狼は腹が膨んで穴から抜けられず、人間に殺されてしまう。それまで狼の手下として餌の供給を命じられていた狐は、狼から解放されて大喜びする。

## 2) 翻訳者と翻訳の改変点

1 番目の収録はボック讀本のドイツ語版【表 1 の 2】であるが、そこにはグリム童話の全文ではなく、原文とは異なる下記の要約が収録されているだけである。

Ein Wolf fiel in eine Grube. Schadenfroh verspottete ihn der Fuchs, tanzte sogar um den Rand der Grube und nannte ihn ein dummes Tier, daß er die List der Menschen so gar nicht gemerkt habe. Wie er aber so über ihn lustig machte, fiel er unversehens selbst hinab.(S. 115)

(狼が穴に落ちた。狐は狼の不運を喜び、嘲笑い、そのうえ穴の周りを小躍りして、人間の罠にまったく気づかないなんて、馬鹿な奴だと言いつつ放った。しかし狐は狼を嘲笑っているうちに、自分も穴に落ちてしまった)【拙訳】

2 番目はボック讀本の島約翰譯【表 1 の 3】で、内容は上記の要約と同じである。明らかにグリム童話とは異なる内容であるが、ボック讀本の目次には Grimm からの引用と明記されている。

3 番目はエンゲリン讀本の岡本啓次郎譯【表 1 の 4】で、ここで初めてグリム童話全文が正しく訳される。誤訳は「皮をなめすほど叩いた」(Haut gegerbt)を「皮を剥いだ」と訳していることと、„lieber Fuchs“を「狐くん」ではなく、「愛ラシキ狐」と訳していることである。明治 18 年出版の『挿図増訂 獨和字典大全』や明治 22 年出版の『挿図 和譯獨逸字彙』には、„lieb“という項目に「愛ラシキ、愉快ナル、樂シキ、快ヨキ、慕ハシキ」という訳語があり、「親愛なる」という語はない<sup>18</sup>。それゆえ岡本は「愛ラシキ」と訳したのであろう。

4 番目のエンゲリン讀本の田中廉二譯【表 1 の 5】は、文体は難解だが上記の箇所は「親愛ナル狐」や「皮ヲ強ク打ツタ」と正しく訳しており誤訳はない。

5 番目のエンゲリン讀本の中村道夫譯【表 1 の 14】は、„lieb“を「愛スル」狐と訳しているが、「散々ニ打ち跛り」とドイツ語の意味を正しく伝えている。

6 番目のボック讀本の中村道夫譯【表 1 の 19】は„lieb“を「愛ラシキ」と訳しており、「皮を柔メシタ」と誤訳している。

なお、上記の訳のなかで興味深いのは、Pfannkuchen (パンケーキまたはクレープ) の訳である。岡本は「皿菓子」、田中は「鍋焼菓子」、中村は「かすていら」(5 番目訳) や「焼菓子」(6 番目訳) と訳している。

## 3) 改変点の分析と考察および収録理由

穴から抜けられない狼が農夫に殺されて、狼に虐げられていた狐が喜ぶというグリム版の内容を、ボックの改変版では穴に落ちた狼を嘲笑った狐が自分も穴に落ちてしまうという内容に変えられている。つまり、狐の報復譚が、人の不幸を喜ぶと自分も不幸になるという教訓譚にすり替えられたのである。ボックがグリム版以外の話をグリム版と信じて収録したのか、グリム版の話をキリスト教道徳に合うよう改変したのか理由は不明である。このボックの本はヒルトが編集したもので、ボックではなく編集者ヒルトが改変したのか、日本の高等学校教授が改変したのか、詳細は不明である。

改変されていないエンゲリン讀本ではグリム版の内容を正確に伝えている。つまり、敵地に乗り込むときは退路を確認しておかないと、命を失うことになるという教訓を伝えており、「富国強兵」政策に有益な話といえる。しかし、ボック版の話は、他人の不幸を嘲笑ったら罰が当たるといった道徳的教訓を伝えるもので、政府の方針を支援する教訓を掲載したものではない。

## 2. 3 番—KHM75「狐と猫」(4 回：ドイツ語 3 回、日本語 2 回)

### 1) 出典とあらすじ

この話は第 2 版から入れられたもので、トリーア近郊の町シュヴァイヒで口承により収集されたものである<sup>19</sup>。



16 世紀に書かれたハンス・ザックスの『格言集』にも類話「狐と猫の寓話」(Fabel von dem fuchs und der katze) が存在する<sup>20</sup>。

グリム童話のあらすじは、木に登って逃げることしかできない猫を馬鹿にして、狐は自分は知恵があり、百以上も防衛策を持っていると自慢する。そこに狩人が猟犬を連れてやってくる。猫は素早く木に登って難を逃れるが、狐は逃げ遅れて捕まって殺されてしまう。百の策略の知恵袋を開けると猫は木の上から叫ぶが、狐は無策のまま殺されてしまう。

## 2) 翻訳者と翻訳の改変点

1 番目の収録はブック讀本の近藤衡平譯で独日併記版【表 1 の 1】である。内容は冒頭部分が少し省略されているが、最後は百の策より、ひとつの良策(木に登る)が身を助けるという教訓を伝えている。

2 番目はブック讀本のドイツ語版【表 1 の 2】である。原文にはほぼ忠実な訳であるが、グリム童話は決定版ではなく第 2 版を使用したと思われる。なぜなら次の表現が存在するのは第 2 版のみだからだ<sup>21</sup>。

„O du armer, buntscheckiger Wicht“, … „Du fragst, ob mirs wohlgehe, und ich bin doch Herr über hundert Künste?“ (S. 26)

「この哀れな三毛やろう」…「おれさまが元気かってか? おれさまは百も技を心得てるんだぞ」【拙訳】

3 番目はブック讀本の島約翰譯【表 1 の 3】である。決定版の内容が忠実に訳されているが、日本語の選択の間違ひがある。前述したように „lieber Herr Fuchs“ を「狐さん」ではなく、「愛ラシキ狐君」と訳しており、 „in dieser teuren Zeit“ (物価高の候) を「貴き時」と訳している。訳者島約翰については詳細は不明であるが、彼は『シェーフェル文典解釈』も全訳しており、いずれも京都の文港堂から出版しているので、京都の学校関係者ではないかと推測する。

4 番目は第一高等学校獨逸文学研究科教員選定のドイツ語版【表 1 の 7】で、1 箇所だけ難解なドイツ語表現 „buntseckiger Wicht“ (三毛やろう) を „Katze“ (猫) に変更しているが、そのほかは決定版の内容に忠実である。

同じブック讀本でも、グリム版の決定版に忠実なもの、第 2 版から引用したものと内容が異なるのは、おそらく編者ヒルトクが第一高等学校教員が原文に手を加えたからであろう。日本に導入されているブック讀本はヘルバート学派の考え方に沿って、大幅に改変されたものが多いようである。

## 第 5 章 獨逸語教科書で初訳となるグリム童話

### 1. KHM 153 「星の銀貨」

1894 (明治 27) 年 8 月の島約翰譯「星錢」はブック讀本【表 1 の 3】所収のもので、文章は文語調で読みにくい、内容は原文にほぼ正確な訳である。

其處デ猶一人ガ來リシ而シテ襦袢ヲ乞ヒシ、而シテ信心ナル處女カ考ヘシ、夫カ暗ラキ夜デアル、誰モ汝ヲ見ヌ…不意ニ星カ天カラ落チシ而シテ純粹ニ固ク光ツタル金貨デアリシ (161 頁) 【太字は筆者】

原文では「スカート」を求められたので、娘は脱いで与えるのだが、ここでは「襦袢」を脱ぐとされている。これは誤訳というより、日本の読者にわかりやすいよう配慮した改変といえよう。しかし、空から降ってくる Thaler は銀貨と訳すべきだが<sup>22</sup>、金貨と訳されている。明治 18 年出版の『挿図増訂 獨和字典大全』や明治 22 年出版の『挿図 和譯獨逸字彙』には Thaler は「銀貨の名」と明記されている<sup>23</sup>。16 世紀ごろからドイツを初めヨーロッパ各地で使われていた大きな銀貨であるが、訳者はターラーが銀貨であるということを知らなかったのか、あるいは 18 世紀半ばから 1872 年 7 月 1 日に Mark が導入されるまで神聖ローマ帝国が造幣した表面に Taler Gold と書かれた銀の記念硬貨のことを<sup>24</sup>、ターラー金貨だと誤解したのかもしれない。訳者島約翰は西洋の昔の貨幣情報には疎かったのであろう。1872 年にプロイセンが銀本位制から金本位制に移行し、日本でも江戸時代までは銀貨が主流だったが、明治 6 年に政府が金本位制を導入したため、金貨が主流の貨幣であると認識されていく<sup>25</sup>。空から星のように降ってくるターラーは色から見ても銀貨と判断するのが妥当と思われるが、ここでは金貨と訳されている。

これまで初訳とされていたのは巖谷小波訳「星娘」(『少年世界』 1896 年) であり、大幅に改変されたもので

ある。母親の看病を熱心にして葬式を出した孝行娘が、弁当、小銭、衣服をすべて人に施して裸になり、星神様を拝むと、空から金貨が降ってくるのである<sup>26</sup>。ここでも降るのは銀貨ではなく金貨である。小波は島訳の影響を受けたのか、Taler Gold と書かれた銀の記念硬貨を金貨と誤解したのか、いずれかであろう。大幅に改変された小波訳に比べて2年も前に出版された島訳は文語調ではあるが、原文に忠実な訳であり、この話の初訳である。

## 2. KHM87 「貧乏人と金持ち」

1896 (明治29)年8月の中村道夫譯「貧窮人ト而シテ富貴ノ人」はエンゲリン讀本 (表Iの10) に収録されている。すでに何度も言及し、先行研究でも指摘されているが<sup>27</sup>、ここでも„der liebe Gott“が「愛ラシキ神」と訳されている。合計12回出現する„der liebe Gott“をすべて「愛ラシキ神」と訳している。さらに貧乏人の亭主が神さまに、「自分たちの寝床で手足 (Glieder) を伸ばしておやすみなさい」という台詞は、「彼等ノ寝床ノ中ニ横ハリ而シテ関節ヲ休マセエガシト願ヒシ」と訳されている。Glieder は Glied の複数形で、『挿図 和譯獨逸字彙』には「関節、四肢」の順に意味が記されている<sup>28</sup>。四肢の方が適訳であるのに、関節と訳されたのは、最初に関節という訳語が書かれた上記の辞書を使用したからではないだろうか。総じて中村の訳は、漢字とカタカナを使用した文語体で書かれており、言文一致の文ではない。しかし、小泉も指摘しているように<sup>29</sup>、これまで初訳とされてきた樋口勘次郎譯「金持ちと貧乏人との話」(『女子之友』1897年収録) は大幅な改変が加えられたものであるが、中村訳はドイツ語の原文に忠実な訳である。

## 3. KHM50 「いばら姫」

1896 (明治29)年の中村道夫譯「ドルンレースヘン」はエンゲリン讀本【表1の10】所収のもので、「いばら姫」ではなく「ドルンレースヘン」と訳されている。その理由は、当時の辞書に„Dornröschen“が記載されていないので、ドイツ語の原題をそのまま日本語に置き換えて使用したのでであろう。文中では「ドルンレース」と「刺薔薇」という表現が使われている。

女の子を授かって „daß der König vor Freude sich nicht zu lassen wußte“ (王はあまりに嬉しくてどうしていいかわからず) を「王ガ喜悅カラ進歩ガ自身ノ外ニアリテ」と意味不明の文に訳している。さらに„die weisen Frauen“ (賢女/巫女) を「賢キ妻」と訳し、„Es waren ihrer dreizehn in seinem Reich“ (王国には13人の賢女がいた) を「國ニ於テ十三ノ皿ガアリシ」と13人の賢女を13枚の皿と誤訳している。そのうちのひとりを招待しない理由を、「只十二ノ金ノ皿ヲ持チシ故ニ左様ニ彼レラノーツガ内ニ止マラ子バナラザリシ」、つまり、13枚の皿の内12枚のみが金であったので招くことが出来なかったと説明している。賢女が赤子に与える贈り物は「徳」(Tugend)、「華美」(Schönheit)、「家」(Reichtum) とあり、富と訳すべき Reichtum を家と誤訳している。「呪いがかなった」(ging der Zauberspruch in Erfüllung) は「迷語ガ充満ニ於イテ達セン」となり、「呪い」を「迷語」と訳している。しかし王子が姫にキス (Kuß) する場面は、「接吻ヲ与エシ」と忠実に訳している。塔で老婆が紡ぐ糸は Flachs (亜麻) であるが、ここでは麻 (Hanf) と訳されている。それゆえ使用された辞書は『挿図 和譯獨逸字彙』か『挿図増訂 獨和字典大全』と思われる。なぜなら、『袖珍獨和辞典』、『独和字彙』、『独和字書大全』では亜麻と訳されているからである<sup>30</sup>。

ペロー版ではなく、グリム版「いばら姫」の初訳はこれまで、1903 (明治36)年の山君 (森於菟) 訳「茨姫」(『万年艸』所収) とされていた。これは原文に忠実で平易な口語体で書かれた名訳である。しかし、中村訳のほうが7年も早く出ているので、初訳は中村道夫訳ということになる。

## 4. KHM178 「プフリーム親方」

1898 (明治31)年6月の近藤衡平譯「匠長ノプフリームカラノ物語」はエンゲリン讀本【表1の18】所収のものである。この話はグリム兄弟が第5版から入れた話である。第5版から決定版までは下記の文章が入れられているが、近藤訳には入っていない。なぜならエンゲリン讀本原文<sup>31</sup>の„Märchen vom Meister Pfriem“ (プフリーム親方) で下記の表現は削除されているからである。グリム版原典と比べると、エンゲリン版は削除された表現が数多く存在する。

„Es ist übrigens eine gewaltige Dummheit, Pferden, die vier Beine zum laufen haben, noch ein Paar Flügel anzuheften“<sup>32</sup>.

「そもそも走るための脚を4本も持つ馬が、さらに翼を2、3枚持つなんて、とんでもない馬鹿げた話だ」【拙訳】

エンゲリンはこの話を 1843 年のヘルマン・クレッケ (Hermann Kletke) 編の本から収集したと明記している<sup>33</sup>。内容もグリム版とは異なる。クレッケ他編 *Berliner Taschenbuch* (ベルリン人の文庫本) とはゲーテやアルニムなど多くの文学者の作品を収録した本である。目次には次のような記載がある。„Märchen vom Meister Pfriem. Von Wilhelm Grimm. Mit Kupfer von Th. Hosemann“ (「プフリーム親方のメルヒェン」ヴィルヘルム・グリムより、テオドール・ホーゼマンの銅版画)。そのテキストを精査すると、グリム童話集 (第 5 版から決定版) の内容と大きく異なり、改変はすべてヴィルヘルム・グリムによりなされたことが判明する<sup>34</sup>。エンゲリンはそれを忠実に収録したにすぎない。ヴィルヘルム・グリムはこの話をまず『ベルリン人の文庫本』に発表して、その後、改変を加えてグリム童話集の第 5 版 (1843 年) に収録したとレレケが明記している<sup>35</sup>。

近藤はそのエンゲリン版の内容を忠実に訳している。そのうえ随所にカタカナでドイツ語を挿入している。例えば、一瞬時 (カイン、アウゲンブリック)、左右 (レヒツ、ウンド、リンクス)、総体 (イン、アルレム)、空中 (イン、ヂー、ルフト)、飛び起キ (スプラック、アウス)、走り戻リシ (ツーリュック、リーフ) などである。

この話は一種の笑い話 (Schwank) に属するもので、人や物の欠点を見つけることが生きがいのような親方が、天国に行ってまであら捜しをして追い出される夢をみたところで話が終わる。他人に厳しく自分に甘い親方はそれでも反省することはない。どこに教育的意図があるのか首を傾げなくなる話である。初訳はこれまで 1927 年の金田鬼一訳 (『世界童話体系』所収) とされていたが、1898 年の近藤譯に移行することになる。

## 結論

獨逸語教科書に最も多く収録されたグリム童話は「老いた祖父と孫」と「蕪」である。3 番目が「狼と狐」、「狼と人間」、「老犬ズルタン」、「狐と猫」、「いばら姫」、「プフリーム親方」である。これらの話は明治期の雑誌で頻繁に紹介された話とは異なる。それらは「狼と七匹の子山羊」(16 回)、「蛙の王様」(14 回)、「ブレーメンの音楽隊」(9 回)、「白雪姫」(9 回) などである<sup>36</sup>。教科書の教材として教えた話と文学者が世に出したい話が異なるのである。上記 7 話のうちヘルバート学派が推奨した話は「狼と狐」のみである。グリム童話は東京大学でハウスネヒトがヘルバート学派の教育学を教えるとき、ラインが推薦した 14 話を中心に日本に導入されたという<sup>37</sup>。そのうち獨逸語教科書に 3 回以上収録されている話は「狼と狐」と「貧乏人と金持ち」「ミソサザイと熊」の 3 話のみである。

森有礼が暗殺され、元田永孚が「徳育教育」を軽視する欧化教育を批判すると、1890 (明治 23) 年頃からヘルバート学派でも徳育教育重視の方向に舵が切られていく<sup>38</sup>。それゆえ、グリム童話もライン推奨のものではなく、日本の徳育教育 (忠孝の徳) に適合するものが選ばれたのであろう。その結果、日本の獨逸語教科書には教訓や忠孝を説く話が多数を占めることになる。一方、文学の立場から『少年世界』や『日本お伽噺』を出版した巖谷小波は「お伽噺」という言葉を使って想像力豊かなグリム童話を紹介する。童話はドイツ語の Märchen、英語の Nursery-tale で「教育的の呼称」であり、お伽噺は Fairy Tale で「其の世俗的の呼称」であるという蘆谷重常の分析は<sup>39</sup>、明治期の童話とお伽噺の関係を端的に示唆している。

明治 31 年に児童学会を結成した松本孝次郎は童話を与える目的は、「知識と興味を与え、想像作用を育成し、児童の同情を発達させ、道徳上の真理を知らしめ、文学上の興味を養う」ことであるという<sup>40</sup>。さらに「おとぎばなしは、…国家の教学方針に妥協した教訓性の重視によって、教育会に受け入れられるようになってきた。しかし、課外読物としての子どもの読物一般については、大勢は禁止的あるいは消極的であった」と述べている<sup>41</sup>。

学校が課外読物と認めていたのはおとぎばなしのみで、小説や創作童話などは認められていなかったのである。教科書が「童話」という訳語で「教訓」を教えるのに対して、小波は「お伽噺」という訳語で「文学性」や「空想性」を追求したのである。さらに『少国民』などの児童雑誌の編集者石井研堂も、「童話集は素より修身書でない」と断言し<sup>42</sup>、国の教育方針に対抗する姿勢を鮮明にしている。それゆえ、一般の児童書や雑誌には、グリム童話集のなかでも想像力に富んだ話が多く紹介されたのであろう。

「老いた祖父と孫」は忠孝の徳を説く話、「蕪」は隣人を妬んで行動することの非を説く話、「狼と狐」は必ず逃げ道を確認してから行動することの重要性を説く話で、いずれも教訓的なものである。教科書を選んだグリム童話は普及せず、文学者が選んだ想像力豊かなグリム童話は、その後広く一般に普及していく。「忠孝」や「富国強兵」のために選ばれた教科書版グリム童話は、時代を下ると忘れ去られる運命だったのである。

注

- 1 府川源一郎「アンデルセン童話とグリム童話の本邦初訳をめぐって」『文学』9巻4号 岩波書店 2008年 141頁。
- 2 同上 141-142頁。
- 3 同上 146頁。
- 4 英語教科書による受容については右記の拙論に詳述。野口芳子「明治期におけるグリム童話の翻訳と受容」大野寿子編『カラー図説 グリムへの扉』勉誠出版 2005年 211-219頁。
- 5 川戸道昭「明治の『シンデレラ』と『赤ずきん』」『児童文学翻訳作品総覧』ナダ出版社 2005年 9-11頁。
- 6 小泉直美「『エンゲリン讀本』における邦訳されたグリム童話とドイツ伝説」『大阪国際児童文学振興財団研究紀要』33号 大阪国際児童文学振興財団 2020年 43-54頁。
- 7 Engeliën は「エンゲリン讀本」と表記されているため、本論ではエンゲリーンではなくエンゲリンと表記する。
- 8 Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. Hrsg. v. Heinz Rölleke. Stuttgart: Reclam, 1980, Bd. 3, S.127.
- 9 小栗栖香平／福見尚賢編譯『挿図増訂 獨和字典大全』南江堂 1885年 880頁。
- 10 李長波「『カレ』の語史とその周辺」『Dynamis:ことばと文化』4号 京都大学大学院 2000年 27頁。
- 11 野口芳子「グリム童話の中の悪人像—魔女と継母を中心に」『武庫川女子大学女性学研究』2号 武庫川女子大学女性学研究会 1997年 17-32頁。
- 12 Sachs, Hans: *Dichtungen. Zweiter Theil: Spruchgedichte*, Leipzig: Brockhaus, S. 138-144.
- 13 Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. Hrsg. v. Heinz Rölleke. A. a. O., Bd.3, S. 229-231.
- 14 *Deutsches Lesebuch für die Mittelklassen der Volksschulen I*. München: Central Schulbücher, 1878, S. 97-98.
- 15 蘆谷重常『教育的応用を主としたる童話の研究』勸業書院 1913年 78頁。
- 16 上村直己『明治期ドイツ語学者の研究』多賀出版 2001年 180-181頁。
- 17 Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. Hrsg. v. Heinz Rölleke. A. a. O., Bd.3, S. 124, 474.
- 18 小栗栖香平／福見尚賢編譯 前掲 591頁。福島鳳一郎編譯『挿図 和譯獨逸字彙』大倉書店 1889年 417頁。
- 19 Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. Hrsg. v. Hans-Jörg Uther. München: Diederichs, 1996. Bd. 4. S.144.
- 20 Sachs, Hans: A. a. O., S. 168-172.
- 21 Jacob Grimm / Wilhelm Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*, 2. Aufl. Köln: Diederichs. Bd.1, S. 271.  
近藤衡平譯『ボック氏第一讀本獨案内』伊藤誠之堂 1892年 71頁。『ボック第二讀本』六合館 1894年 26頁。
- 22 Taler は1901年までは Thaler と表記され、16世紀から西洋で使用された大きな銀貨。Kluge: *Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache*. Bearbeitet von Elmar Seebold. 25. Aufl., Berlin / Boston: De Gruyter, 2011, S. 905.
- 23 小栗栖香平／福見尚賢編譯 前掲 984頁。福島鳳一郎編譯 前掲 562頁。
- 24 Helmut Kahnt: *Das große Münzlexikon von A bis Z*. Regenstauf: Battenberg Gietl, 2005. S. 485.
- 25 岡田俊平「わが国における銀本位制時代の通貨問題」『成城大學經濟研究』19号 成城大学經濟学会 1964年 23頁。
- 26 巖谷小波「星娘」『少年世界』2巻6号 博文館 1896年 28-30頁。
- 27 小泉直美 前掲 47頁。
- 28 福島鳳一郎編譯 前掲 313頁。小栗栖香平／福見尚賢編譯 前掲 403頁には（四肢、関節）の順に表記。
- 29 小泉直美 前掲 47頁。
- 30 小栗栖香平／福見尚賢編譯 前掲 333頁。福島鳳一郎編譯 前掲 257頁。亜麻と訳されている辞書は次の3冊：田村化三郎編譯『袖珍獨和字典』南江堂 1893年 109頁。風祭甚三郎編譯『獨和字彙』後学堂 1887年 186頁。行徳永孝編訳『獨和字書大全』金原寅作 1890年 292頁。
- 31 Engeliën, August und Fechner, Heinrich: *Deutsches Lesebuch. Aus den Quellen zusammengestellt*. Ausgabe A, Teil III, Berlin: Schulze 1895. S.161-163.
- 32 Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. Hrsg. v. Heinz Rölleke. A. a. O., Bd. 2, S. 338.
- 33 Engeliën, August und Fechner, Heinrich: A. a. O., S.161.
- 34 *Berliner Taschenbuch*. Hrsg. v. Hermann Kletke, Alexander Dunckner und Eduard Haenel. Berlin: Königl. Hofbuchhändler, 1843, S. 168-173.
- 35 Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. Hrsg. v. Heinz Rölleke. A. a. O., Bd. 3, S. 509.
- 36 久保華譽『日本における外国昔話の受容と変容』三弥井書店 2009年 25頁。
- 37 イエーナ配列の14話（狼と七匹の子山羊、赤帽ちゃん、見つけ鳥、ホレさま、ならず者、雌鶏の死、麦藁と石炭と豆、麦の穂、狼と狐、ブレーメンの音楽隊、雪白とバラ紅、甘いお粥、星の銀貨、貧乏人と金持）が導入されたという。中山淳子『グリムのメルヒェンと明治期教育学』臨川書店 2009年 58-59頁。
- 38 同上 22頁。
- 39 蘆谷重常 前掲 第1章 9頁。
- 40 菅忠道『日本の児童文学』大月書店 1956年 66頁。
- 41 同上 67頁。
- 42 石井研堂『日本全国国民童話』同文館 1911年「著者の告白」4頁。